

第3章 韓国の経験

韓国の農村社会が、発展に向けて自らの動機で動きだしたのは1960年代に入ってからのことである。それも、市場立地に恵まれたごく一部の地域に限られ、現在みられるような全国的な活性化はセマウル(Saemaeul)運動を契機とする1970年以降のことである。従って、本書が意図する“local initiatives in development”という意味での地域社会の発展は、セマウル運動の展開過程の中で説明し得るものであるが、一方、強力な運動論を契機としてしか発展し得なかった受動的で沈滞したそれまでの農村社会を理解しなければ、韓国における地域社会開発の真の意味を見失うことになる。

そのため、まず500年にわたった李(Yi)朝の統治体制の下で、その身分制度、貢納制度、地方行政制度等との関係で深く構造化された地域社会の特性を、次いで日本の植民地行政の下で行われた農地収奪による農村疲弊、そして独立後の農地改革にも関わらず、朝鮮戦争、急激な工業化等の犠牲となってさらに疲弊していった過程を整理する(1)。そして最後に、セマウル運動の展開と、それが農村地域社会の自立的発展に果たした役割についてその意味付けを行う。